

資料館だより 『記念講演会雑感』—昨年までの特別展は主として歌人としての信綱先生を中心にして開催してまいりました。今回の企画に当たり、三重大の廣岡義隆先生

を中心に、村田邦夫・辻正の両先生及び担当課員がたびたび協議を重ね、本年度は当資料館所蔵の万葉集研究の著作を系統的に陳列して、その研究の深さと普及の広さとを、原本を求めて・校本万葉集・注釈・歌学史文献学の研究・余滴・普及活動の五部門に分けて紹介する方針を建てました。期間は七月十四日から八月末日まで。記念講演は八月一日の日曜日を選び、講師を廣岡・村田両先生に懇請して快諾を得ました。

なお、これに先立ち、信綱先生の高弟で百歳の天壽を全うされた故安藤寛氏愛蔵の歌書八〇〇余冊のご寄贈をその遺族から受け、更に、信綱先生の助手として最も信頼の厚かった元国立国語研究所長林大先生から信綱先生と柳原白蓮女士との色紙短冊二〇点をご寄贈いただきました。このようにして、資料館は一層の充実を加えて開催の日を待ったのであります。

講演会当日は、専門的な演題のため来聴者の数を危惧いたしました。早朝から問い合わせの電話もあり、遠く東京・神奈川から泊まりがけで越えられた方もあって、結局、県外十四名、県内各地から二一名、合せて百数十名の聴講者で会場は溢れました。特に東京から駆けつけられた林先生を開演前に生家記念

館に御案内いたしました時、衣桁の信綱先生の紋服と羽織とをいとおしむように整えておられました。それが強く、私の印象に残っております。



講演中の廣岡義隆先生

信綱先生の研究方面を、村田先生は『岩波文庫本・新訓万葉集について』と題してその普及の方面を語られ、聴衆はまことに熱心に聞き入っておられました。また終了後、林・廣岡・村田の三先生が展示室で資料の説明と質問の応答に当たってくださいました。

いきましたので、来館者の皆さんに大変喜んでいただくことができました。なお、講演の内容につきましては、後日、何らかの形でまとめて公表したいと考えております。

最後に、ご多忙の中をこころよくお引受けいただきました上、多数の資料をお貸しくださいました廣岡先生、遠隔の神奈川県から準備のため数回お越しいただきました村田先生、当日何かとお世話いただきました竹柏会々員の方々から感謝申し上げます。

(文化財保護課課長 石井 平)

佐佐木信綱資料館だより

—第五号—

目次

私の好きな信綱の歌	俵 万智	・鈴鹿市教育委員会文化財保護課 (TEL・〇五九三・八二・一一〇〇)宛 〒五一三 鈴鹿市神戸一八一―一八
展示室だより(五島美代子書簡)	辻 正	・佐佐木信綱資料館 (TEL・〇五九三・七四・三二四〇) 〒五一三 鈴鹿市石薬師町一七〇七
信綱一首(五)	村田 邦夫	
資料館だより(記念講演会雑感)	石井 平	

私の好きな信綱の歌

俵 万智

数年前、「一心の花」の全国大会が鈴鹿で行われた。その折、佐佐木幸綱先生の講演があり、私も前座で少し話をさせていただいた。タイトルは「私の好きな信綱の歌」。子どもを歌った歌、カラフルな歌……そのなかで、とっておきとして揚げたのが次の一首である。



文化会館における俵万智氏

花さきみのらむは知らず
いっくしみ猶もちいつく
夢の木実を
花が咲き、そして実がなる
かはわからない。けれど、い
つくしんでなお大切に私は持っ
ている、この夢の木実を……

それぞれの夢が託されていい。かなうかどうかわからない夢を、そっと大切に心にしまっている人は多いだろう。確かに花が咲いて実るといふ保証などなくても、その夢を心のなかで温めることが、素敵なのだ。

誰の心にもあるささやかな夢を励ますいっぽう、もちろんこの歌は、信綱自身の夢を語った歌でもあるだろう。信綱にとっての「夢の木の実」とは？ たぶんそれは、短歌であり、国文学の研究であったことと思われる。すでにその道で名をなしていたとはいえず、創作の道にもからあとから湧いてくる。

五七七七七の五七にあたるところは「ハナサキ、ミノラムハシラズ」となっている。4+8で十二音。5+7の十二音と、合計ではつじつまが揃っている。が、「花咲き」とも効果的だ。不確かだけれども、それぞれの独特な感じが、賭ける、という強さが、この上二句のリズムからは伝わってくる。

そう、勇氣。この歌は、夢を持ちつづけることの勇氣を歌ったのではないだろうか。夢には、必ず実現するという保証などない。むしろ、花も咲かず実もならないことの方が多いただろう。それでもなお、夢を大切にすることは、夢をあきらめるよりもずっと、強い精神力が必要だ。たとえば、片思いの恋。失恋しない最良の方法は、恋を

あきらめることである。相手を強く思えば思うほど、失恋した場合のショックも大きい。それでも猶、もちいつくことができるだろうか？ 恋の夢の木実を……。

（歌人・信綱賞短歌大会選者）

展示室だより 当資料館に数多く所蔵されている書簡の中で、今回は「母」の歌人と呼ばれ、わが子への想いをひとすじに歌い続けた才媛五島美代子が、師信綱に宛てた手紙を紹介したい。

うららかなる春に候 御地のさくらは散りすぎ候やらむ師の君 御健やかに在しませ候や さてもかの忘れがたき日よりいく十日 あまり嬉しさに癒え半ばなりし身を忘れ また渡辺夫人のつがのため休む日なく帰京いたし候ため暫く弱り仕候 日々仰せつけの歌 詠み足すべく努め候も今にして二十年前の日々

わがせことわ子とたぐひて春の日の大海ゆく大き幸はも

扇面に御染筆たまはりて船出せし頃をおもへば前の世の如き感じにて木枯しの中に春の日の花々おもひ出で候 氣持とりなほしても／＼ひとみありし日の歌詠み候ことむづかしく とりかへし涙に沈み候ことに候 何とかしてかの日々のところになりたくせめてたのまれ候

ラジオ放送録音にもイギリスの子らの事など語り候も作歌となれば如何にしてもまことの吾に直面いたす外なく冬枯のひびきのみ心の中を鳴り渡り候 かくて第二書房



信綱宛 五島美代子の手紙

に原稿わたすことあまりおくれ候てはおほけなき御配慮に副ひまつる事もかなはじと焦心いたし候 校正中にももし詠み足すところ出て候はば まことに恐入り候へども御覧ねがひたく過日御覧ねがひ候 清書に省きおきし渡欧中或は帰途の作封入いたし候 これを加へ候てもよろしきや否恐入り候へども御返したまはりたく長歌はあまり長きため省きしものにて当時新村大人に大変御ほめいただききその後 も度々モンスーンの歌はなど仰せいただき候ものに候 子のことも詠み入れあり候へば加へ候てもよろしく候や伺ひ上げ候

伊藤氏には本日いま一度通信いたしいよいよ原稿を渡すべき日打合せいたすべく候 あまりなる怠慢御怒りなきやと始終心にかかり自ら責め候ままに母の十年祭ひとみの三年祭を合せていとなみ今は一すぢにこの著刊行にと起ち返り申候 何とぞ何とぞまげて御ゆるしたまはりたく候 この二十二日ひとみの誕生日には何としても全部当方の仕事すませ第二書房の方にとく出版の運びになり候やうたのみ入り候つもり候 又しても御願ひと何とも申訳なき御わびのみにて

四月八日 五島美代子

師の君 御もと

〈封筒の裏〉

東京都杉並区 堀之内
二ノ四ノ五 五島美代子
四月八日

〈小解〉この手紙は昭和二十八年四月八日付で信綱宛に送られたものである。最愛の娘、ひとみに先立たれた母の深い悲しみが、幸せであった頃への追憶とともに行間に滲みでていて、読む者の心を痛いほどに打ってくる。

①歌人渡辺とめ子②夫、茂の留学に伴い、長女ひとみと渡英した③茂・美代子の長女、昭和二十五年、二十四歳で急逝④歌人である前に母であること―心の相克、葛藤がうかがえる。⑤昭和六年、夫・長女とイギリスへ。ウェールズに住む。同八年、夫をベルリンに送り帰国。⑥第一歌集「暖流」（三省堂）中の『滞欧歌鈔』にある。季節風には長歌一首、反歌二首が掲載されている。（長歌は略）○しづくしづく窓一面に天地は潮けぶりしてただたふわき

信綱一首・5

牡丹花のこきくればなみが灯に映
ゆる卓の前なる黒衣の女

昭和十五年刊第七歌集、『頼の音』。既に日常化した日中戦争は太平洋戦争を翌年に控え、皇紀二六〇〇年を迎えた六〇歳後半の作で、折々に孤独な仕事場になっていた横浜ニューグランドホテルのロビーである。灯に映える牡丹は深紅、その影をまとう異国の婦人は黒衣、華麗な倦怠が作者に沈黙を強いる。（村田邦夫）

○親子三人いのち一つに凝る時しとどろき鳴りて海は揺り動く

⑦新村出氏⑧前出⑥の歌⑨第二書房社長、伊藤文学氏⑩千代健、昭和十八年、四十五歳で逝去。⑪大正十五年四月二十二日に出生。⑫『母の歌集』昭和二十八年、白玉書房より刊行されている。第二書房に照会したが現社長から「父の存命のことゆえ経緯は不明」との返事があった。

◆後藤美代子 明治31・7・12―昭和53・4・15。歌人。東京生れ。大正四年、信綱に入門。石博（五島）茂と結婚。新興歌人運動に加わり、翌年夫や前川佐美雄と『尖端』を創刊。歌風は、母性愛を基底として近代的知性を織り込む。特に長女を失った悲しみの中から母子の交情を叙した『新輯母の歌集』が読売文学賞になった。ほかに歌集多数。なお、昭和三十四年、皇后陛下（当時美智子妃殿下）の御歌指南役をつとめた。（『短歌』平成四年四月号・大特集「母」の歌五島美代子略年譜 大野とくよ編 参照）

（文化財保護課 辻 正）